

しづかに時の過ぎてゆくのを…

「中さんの散歩みち」

「しづかに時の過ぎてゆくのをみるのはしづかな流をみるやうにしづかである。」あの「銀の匙」で著名な作家中勘助が平塚時代の生活を余すところなく書いた日記体の随筆『しづかな流』の冒頭です。

『しづかな流』には191編の詩があり、その詩の多くには今から80年前、大正の末から昭和の初期にかけて、松林に囲まれた平塚海岸の豊かな自然が瑞々しく描かれております。

「名もなき思ひ」

春の雨 しめやかに
ゆふけぶる 小松ばら
やきたての 松露のかをり
ひとりくむ 五勺の酒
あすはも 落葉やかかん
松かさをやひろはまし
おもひいる 名もなき思ひ
あととなつかし 雲にきゆる鳥



松露

当時、松林では茸の松露がどっさり取れたそうです。明治29年『平塚繁盛記』には松露問屋山口竹次郎の名があります。平塚に家を建てた理由を中勘助は、暑さ、寒さの折りに母と脳溢血に倒れた兄を静養させるためと記しています。

「わが宿の」

わが宿の
小庭にまいた 稗のたね
みなはひろふな 鶉の子ら
芽をだす稗が みたいもの
その鶉を
雨はうつなよ 風はふくなよ
夏ぢやとて
ぬれて吹かれりや 寒かろうもの
かぜひかうもの



松林

当時の平塚海岸。中勘助は家の東側を南北に通る道を朝夕散歩していました。散歩が好きで1日のうちで最も幸福な時でありました。その散歩の途次平塚海岸地域を題材とした多くの美しい詩が生まれました。中勘助は孤高の人でありながら、近所の人や子供、鳥や植物に向けた心はあくまでも優しく、温かみのある眼差をしていました。「中さん、中さん」とみなさんが呼んでいる声が、今でも聞こえてくるようです。

「帽子」

毎日の 散歩にかぶる
猪口がたの へろへろ帽子
色あせ 油じみ
くたくたに 古びはてたれ
田舎まはりの 手品師が
かにかくと てまさぐりつつ
いまひと品とりだしまーす
てなぐあひに このなかから
わたしの歌が ころげだした
くたくたに 古びはてたれ
ばかにならぬ へろへろ帽子



南北の散歩道

中さんの気に入った散歩みちは、南北の道（羽衣町通り）から海岸に沿って東西に通っている道を西に向かい花水川河畔を経て海岸を逍遥したと考えられます。当時の平塚海岸には撫子が咲き乱れていたそうです。

「海べの野をゆけば」

海べの野をゆけば
なでしこぞ咲きつづく
空にひびく雲雀の歌は
わが心をたのしましむ
なでしこの野をこゆれば
しづかなる川ながれたり
葦の葉はかすかにそよぎ
朝の雲影をうつす
あはれここに松風と波の音をききつつ
ひととせもととせもあらまし



花水橋

海岸では地引網が盛んで300～400mおきに行なわれ、ある日は「山ほどの小鯹まるまる肥えたすばらしいかます、えその多数、尺ほどの黒鯛、ほうぼう、蟹とたくさんの雑魚がとれた」とあります。中さんには江戸っ子の血が流れているのでしょうか。この詩のように踊りたくなるような名調子の歌もかなりあります。

「朝網」

よいやひけひけよい朝網を
朝は気もよい潮もよい
よいやな よいやな
さかなよるよる曳きてもそろふ
あさ日さっとさしや黄金ちる
よいやな よいやな
鯛が千匹さよりが二千
龍の乙女もちよいとあげる
よいやな よいやな



平塚海岸の地引

今回ご紹介しました詩はごく一部です。詩人中勘助の素敵な詩がほかにたくさんあります。『しづかな流』は現在残念ながら絶版です。市内の図書館に単行本、全集（5・6巻）がありますのでご利用ください。お読みになり、そして静かに朗読をしてみてください。きっと美しい平塚海岸の景色が広がります。

